令和８年度　研究概要

<table>
<tr><td colspan="2">所属名
総合教育センター　カリキュラムセンター</td><td colspan="2">研究会議名
高校教育　研究会議</td></tr>
<tr><td colspan="2">年次　　１―１</td><td colspan="2">担当責任者（　一志　文登　　）　担当指導主事（　武内　洋平　）</td></tr>
<tr><td>研究員</td><td colspan="3">相馬　虎之介　　（川崎市立川崎高等学校　　全日制）
齋藤　嘉貴　　（川崎市立川崎総合科学高等学校　定時制）
赤池　良介　　（川崎市立橘高等学校学校　　全日制）
青木　拓海　　（川崎市立高津高等学校　　全日制）</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">思考の視点の深化を目指した実践研究
～自分の言葉で考えを練り上げる力の育成を目指して～</td></tr>
<tr><td>育成を目指す資質・能力</td><td colspan="3">自分の考えを練り上げる力</td></tr>
<tr><td>研究内容</td><td colspan="3">文部科学省は、令和７年の論点整理において「主体的・対話的で深い学び」の実装を次期学習指導要領の方向性として示し、令和８年の高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～２０４０年に向けた「Ｎ－Ｅ．Ｘ．Ｔ（ネクスト）ハイスクール構想」～では、「自ら問いを立てる力」、「他者とともに価値を創り出す力」の育成を掲げている。また、大学入学者選抜において総合型選抜と学校推薦型選抜の利用者が過半数を超える中、不確実な時代を生き抜く為の柔軟な思考力と表現力の育成は急務となっている。
本市市立高等学校においても、入試に向けた志望理由書や課題作成において、生徒が個人的に生成ＡＩを利用し、容易に「正解」を入手する姿が見られるようになった。しかし、理由や根拠を吟味せずに出力された結論に依存する為、自らの考えを納得解へ導くことができなくなってしまうという懸念が生じている。その為、自らの考えを持つことや、そう考えた理由、根拠について説明する授業の重要性がますます高まってきている。
本市における先行研究（角田、２０２１）では、「２０の思考の視点」のうち、「３つの思考の視点」を取り入れた授業により、課題に対して考え続ける態度や根拠を示して自分の考えを説明できる生徒の育成に一定の成果を見たが、一方で「思考を限定させてしまう」という課題が残された。
そこで本研究では、生徒が自ら思考の視点を想定し「考えを練り上げる力」を育成させることができれば、自分の言葉で納得できる考えを表すことができると考えた。ここで示す「考えを練り上げる力」は、自らの考えを納得解へ導き、他者へ説明する言葉にできることと定義する。
具体的には国語（古典探究）と地理歴史（地理総合・歴史総合）の授業において、単元の山場や節目のタイミングで単元目標に迫るパフォーマンス課題等に取り組み、成果物の発表前に「２０の思考の視点」を参考にし、他者から質問をされたらどう説明するのか想定させる。この手立てを通じて「生徒が自ら質問内容を想定し、多角的な思考の視点を持つことができれば、他者との対話において問い返しを受けても、自分の考えをより詳細に説明できるようになる」という仮説について検証する。
検証方法については、授業での成果物や説明内容、検証授業前と検証授業後のアンケートから生徒の考えの深まりについて変容が見られたか定性的に分析する。</td></tr>
</table>